

年間200件の手術、「胆のう専門外来」に海外の患者も 東邦大学医療センター

大橋病院消化器外科（肝胆膵外科）教授・渡邊学 先生

歴史ある古い建物から最新設備の整った新病院へ。入院患者を連れた引っ越しの様子がNHK「ドキュメント72時間」でも紹介された東邦大学医療センター大橋病院（東京・目黒区）。ここの肝胆膵外科部長を務めるのが、同大医学部教授の渡邊学医師。

肝臓、胆のう、膵臓の外科治療を一手に引き受ける。中でも医療界の注目を集めている取り組みが、胆のう疾患に専門特化した国内でも珍しい「胆のう専門外来」だ。その情報を知った患者が日本全国どこるか海外からも訪れている。

胆石や胆のうポリープなどの良性疾患を中心に、胆のうだけで年間200件の手術を行っている。

「昔は開腹手術だったので数週間の入院を余儀なくされていましたが、いまは腹腔鏡手術が普及したことで、患者さんにとっても手術が身近になりました。腹腔鏡手術では、木曜の午後に入院して金曜日に手術、日曜日には退院が可能です」

胆石は、石が胆のうに留まっていれば痛みもないが、胆のうの出口に詰まってしまうと激痛を引き起こす。胆のうポリープも小さければ問題がないことが多いが、サイズが10ミリを超えてくるとがんのリスクが高くなる。

「痛みがない段階の患者さんに、手術のリスクとベネフィット（効果）を説明すると、いまは手術を希望される方が多くなりました」

腹腔鏡によって得られる低侵襲という利点と症例数の多さ、そして丁寧な説明を心がける渡邊医師の診療姿勢に、患者は安心感を得るのだろう。近年は単に腹腔鏡で行うだけでなく、従来お腹に4カ所開けていた手術創を、1つの穴だけで行う「単孔式」という超低侵襲の手術も導入している。

高度な技術と温厚な人柄で患者満足度を高める胆のう手術のスペシャリストが、ピカピカの新病院で腕を振るう。（長田昭二）



■渡邊学（わたなべ・まなぶ） 1966年、埼玉県川口市生まれ。91年、東邦大学医学部卒業を卒業し、同大消化器外科に入局。講師、准教授を経て2019年から消化器外科教授。日本外科学会と日本消化器外科学会専門医・指導医、日本肝胆膵外科学会高度技能指導医、日本内視鏡外科学会技術認定医ほか。医学博士。趣味はテニス。

引用 <http://www-origin.zakzak.co.jp/lif/news/190524/lif1905240007-n2.html> タ刊フジ【ブラックジャックを探せ】より